

五行歌

青い小花のワンピース

伊東柚月



いま、リビングの端の小さなテーブルの上で、写真の母がやさしく笑っています。
病が出ていないときの母は、人一倍明るくて元気な人でした。
この歌集に出てくる病んだ母は、母の一部分でしかありません。
そしてそんな母への私の想いも、ほんの一部の感情に過ぎません。
でも、肉親であるがゆえの強い感情が、すこやかな母を押しつけるようにして、このような歌を書かせました。
今は思います。
どんな感情であろうと、私の人生に陰影を与えてくれ、私を強くしてくれたことには違いない...と。
そしてまた、多少強がりと言うのなら、苦しかったけれど何も感じずに生きるより良かったのかもしれない...と。
心の病に苦しむ人、その家族や友人...もし、あなたがそういう人の1人であるなら、少しでも救いの気持ちを感じていただければと願います。
重い歌ですが、私自身、吐き出すことで救われたのは事実なのでありますから。

2010年12月 風の強い夜 伊東柚月

赤々と脹らみ

やがて

自虐にしばむ

いびつな太陽

それが母

よるべのなさに

ひたひたと

侵食され

母は

童女になるしかなくて

壊れた母が

こしらえた晩ごはん

鮮やかに黄色い

目玉焼き

一つ

闇への

兆しと知らず

明るすぎるほど

明るい母が好きだった

幼い日

夏休みは

のびのび過ごした

祖父母の家には

トトロが

いたのかもしれない

どこか

やけっぱちな

爽快感で

妹とふたり

境遇を笑い合ったり

わたしでなく

もっと

やさしい娘だったら

あなたの闇を

救えたでしょうか

マッポなママが

ひらりと飛んだ

青い小花のワンピースに

一億のセミの声

降る

鉄格子のある

病院には

流れない時間

庭のポプラだけ

そよいでいた

「あんたを産んでから

病気になった」

否定から始まった人生を

一つ 一つ

肯定に変えてきた

ひび割れガラスを

包むような

父の両の手

捨てない

かたち

病む娘を

祖母は

どれほど案じて逝ったろう

健康な子でも

心配は尽きぬのに

いつか叫びだす

血かもしれない

息子たちよ

遅く

生きてゆけ

消えそうな火が

灯りつづける

内側

姿なき何かに

守られている

誰にも潜む

闇を思う

あなたの剥き出しのそれが

照射するとは

皮肉だけれど

愛おしい傷に

なるだろうか

親の痛み

子の痛み

私を彫り続けてゆく

この特集から2年も経たぬうち、突然この世を去った母。
もう少し経ったらまた違う形で詠えるような気がしています。
生々しいものが時とともに澄んでいくのかもしれませんが。
でもこの作品群も、ありのままの心の叫びとして残しておきたかった。
...読んでくれてありがとう。

著者拝

